

現代俳句千葉

114号

巻頭エッセイ

俳句の原点 箒川 幹事 三須民恵



私は栃木県大田原市に生まれ育った。近くには塩原温泉から流れる箒川がある。下流ではあるがとても豊かな川で東北本線の鉄橋も通っている。父はよく私と弟、犬を連れその川に行った。何故かと言えば羊を飼っていたので毎日の餌に草が必要だったからである。羊は年に一度毛を刈って、それを糸織機で毛糸にする。何かで色を染めたりして、帽子や襟巻き、チョッキ、セーター。純毛100%の品が出来る。全て手編みなので擦り切れては解き、又編んで、大切に糸糸を使った。私はまだ小学校に上がるか、その前辺りなので記憶はうる覚えではあるが父から色々な事を学んだ。特に箒川では魚は勿論の事、虫や植物、鳥など、又河川敷を開墾（当時は自分で開墾すればその分畑として使用出来た）して野菜の育て方や保存の仕方等、今思えば生の勉強が出来た事は心の宝物になっている。箒川にはかじかが沢山棲んでいた。母はかじか獲りの名人だった。石の下に手を入れるとぬるっとした感覚がありそれを掴むのだが、ただ掴んで逃げられる触った時にどちらが頭か瞬

時に判断して頭の方から素早く掴む。又釣る事も出来る。普通の釣りとはい違い細くしなる竹の先に直接針を付けて川虫を餌に大き目の石の上流に入れて置くと、竹がブルブル振え出す、一丁上りお見事！。鮎は勿論、うなぎや鯉、鮎、雑魚、鯰にギン魚、八目うなぎ、川ガニ、川エビ、蜆、ハヤ、時にはマス、クレソン。箒川は一本の流れではなく色々に分かれて、魚達もきちんと棲み分けている。岩から流れ出る清水を中心にした所、その崖の上には大鷹が棲んでいた。田に流れるホソ、浅い川、激しい流れの川、穏やかな溜まり池の様な所、泥鰌やタニシも沢山いた。源氏蛭、平家蛭、ゲンゴロウやイモリ皆友達だった。陸の方では今では珍しい川原のおばさん（翁草）川原ナデシコ、吾亦紅、葉になるゲンノシヨウコ、竹煮草この竹煮草は毒でもあるが葉や枝を折り茶色の汁を足や腕、手に付けておくと刺されぬ。カッコウや時鳥、雲雀やキリギリス、数え出したら切れない。俳句の卵を抱きながら、中学二年の時、国語の教科書の中に、「五月雨をあつめて早し最上川」の句と写真に出会った。たった十七文字で雄大な景色を表現出来る事に感動し、自分なりに作句した。そして現在、師系は河東碧梧桐―大須賀乙字―吉田冬葉―名取思郷―野木桃花率いる「あすか」に所属する。

目次

| | |
|---------------------------|-----|
| 俳句の原点 箒川 三須民恵 | 1 |
| 諸家近詠 | 2~4 |
| 私の感銘句 | 5 |
| 津田沼研究句会、青葉研究句会報告 | 6~7 |
| 柏研究句会報告・ひろば | 7 |
| 第3回ミニ吟行会 上総・国分尼寺跡国分僧寺跡 | 8~9 |
| 青葉研究句会・一泊吟行記 | 9 |
| 新会員紹介・図書紹介 | 9 |
| 会員・会友の近況 | 10 |
| 掲示板 | 10 |

諸家近歌

新米のおんな先生花は葉に
メッセージとどけにもどる石鹼玉
饒舌の痴呆症とやシクラメン
列島に水枕ほし昼寝覚
郷に湧き狂おしく舞う恋虫

山中 頼子

詩の匂い平和の匂い文字涼し
夏大根飴色に煮え加齢臭
原爆忌水平線に瑕一つ
自閉してででむし時機を待ちおりぬ
冷霊の気なる伏流水の音

実莉 繁

麦踏みをつづきの父の遠さかな
石と棒持つてかがやく蝌蚪の国
昆虫のいのちがあれば夏休み
蛍籠からとり出せり旧い家
八月の負を頷ちもつ正座かな

渡辺 澄

踏切と夕日が好きで卒業す
坂道は海で終りぬ春の夢
青葉若葉ドーベルマンは風ですか
少年暗し泰山木の花もまた
六月や砂山ひとつ流れ着く

森村 文子

明月院梅雨しばらくは沖停り
草笛の子らに昭和が振り返る
工場の鉄鎖が解かれ夏の月
八月のあの日あるとき無重力
秋つばめ夕日のかげら掬いけり

若林 佐嗣

俗塵をはなれ春風垣を踰ゆ
吉保の息づく池や柳絮とぶ
ご破算でねがひましては山笑ふ
枇杷の実や段畑越しの地平線
隠耀の花苔いろはかたはらに

元橋 孝之

パレットに魂の色春時雨
ある帰郷花桐の齢うやむやに
馬のいる森の展開聖五月
船唄が紅葉絵巻に棹をさす
海を見に忘年詰めた旅靴

村上千代美

植え終えし田毎に青き風生まる
螢火のこぼれて闇の水匂う
江戸切子きらりと光り夏兆す
寄り添えりこの手花火の果てるまで
苦瓜をぶらりと育て蔭もらう

森 孝子

花粉飛ぶ春の目鼻に容赦なし
青葉闇陶のみみづく目覚めけり
薔薇満開少しばかりの羞恥心
万緑の沸点過ぎれば風になる
蠅帳に帰宅時間のメモを置く

山崎 幸子

春愁や夢を入れおく器がない
夏銀河揺すれば降るか水の声
独り居の言葉みな捨て夏に耐え
悩みごと大方は些事葱の花
涙腺にやわらか 柔らか 梅雨

山崎 文子

新樹燃え道祖神も燃えていた
螢ここに告げたる娘世に居ない
向日葵たち戦の前に立ちふさぐ
青大将のたうちまわる大河かな
児の汗を拭う未婚の母であり

吉野 精

啼きたくてならぬ狐に憑いてみる
ニンゲンに戻らう薄氷軋ませて
恵方に決まつてる競馬場へ行く
見はならぬ春の虹いま産むところ
春の夢より覚めてまだヒトのまま

宮本美津江

雪女ひとつはひとりの影曳いて
ニーチェ以後厨に充ちて春の闇
走り梅雨につぼんすでにうすあおく
雲のよう放蕩のよう牛蛙
音消せば三百六十度春夜

山崎 聰

掛け声のいなせや糶のさくら鯛
青き踏むマグマ溜りの国にいて
奥多摩の秋を運んでくる水面
玉響のいのちなりけり秋の蝶
石榴笑む遠に子捕りの鬼子母神

渡邊 廣子

弟という距離がある冬座敷
散りますと言わぬ椿が羅針盤
白鳥もほろり泣けます現在地
ぼうたんに今なら聞ける最終章
旅人の儘でいいのか花の雨

三好美穂子

諸家近歌

柳本 ゆみ

泣き笑い一大事なる振花
草笛や自警団に怖れいて
完走のランナーになれ蝸牛
蠟燭を吹き消す未来には水母
臆病な五体のままに走馬灯

森 章

地球儀の中はからつば蟬時雨
ざしぎしと籐椅子今も変わらずに
大花火ゆつくりと闇崩れたり
金魚玉目玉泳いでおりにけり
番号の打たれし化石夏の果

山口 彩子

よろけ縞着て陽炎になりにゆく
闇青き一村笛ながしかな
青風秒針休みなく急ぐ
黄ばみつつまだ見えている残暑の背
蟬塚にみんな入りゆき秋の雷

山端かすみ

夏つばめ遊びし子らに点と線
山びこは二十歳の声よ夏帽子
嘘泣きを覚えはじめた夏の帯
土筆んぼまだ空つぼのランドセル
煩惱や風に託した落し文

山村 則子

父母を遠くに置いてさくらもち
源流をすこしはなれて山法師
万緑やちからいっばい汽笛鳴り
遠来の潮より生まれさくら貝
蟬時雨たそがれという穏れ道

森 美樹

走る蛇追いかける少女気紛れな
再会は流星のよう不意にくる
尾を切る蜥蜴サツカー少年に追われて
バスケットに子猫新幹線で運ぶ
蛇穴を出るや老女の胸に艶

田村 隆雄

滴りて海へ緋く博物誌
どかんと猛暑こんなところに誤字脱字
通学路ころがるように夏休み
猛暑居すわる動くものみんな標的
望郷の万の力が雲の峰

山中とみ子

酔芙蓉紅の中なる命かな
蝉しぐれ昭和の傷の残る石
木も石も疲れの溜る熱帯夜
振りむけば水の向こうの桐の花
はまなすや海女の墓標の潮湿り

山中 葛子

歩かねば肉体怖し苔に花
紅茸を筒抜けにして三日女逝く
蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす
やぼったい母情もまじり花は葉に
余花の時いちばん遠くへかくれんば

山口 梅子

青き地球よテロ余所事に卒業す
蓮見舟二胡の音清に象鼻杯
ペンギンを背伸びして見る夏帽子
泥田植るよろけよろけて足を抜く
点し合ふ愛こそよけれ恋はたる

八木 邦夫

薔薇ノ花咲ク白秋ノ隆キ鼻
蕭蕭と霰雨不器量な猫愛す
羅や蛇身の神に手を合わす
背伸びして手を振るナース凌霄花
海鳴りへ一途に急ぐ蟻の列

村田 珠子

御輿揉む万の袴りの手拍子に
明易し他人のような足の裏
蟻の列声なき声を野に放ち
尺蠖の尺とるたびの武者震い
出てみよう母さん枸杞の実が真っ赤

吉岡 一三

七月の静物牛の頭蓋骨
一軒の夜店が鳴らすカルメン組曲
ひまわりを剪って母国へ穴開ける
原発を使わぬ時間蝉しぐれ
真葛原軍馬残ラズ帰還セズ

門谷 杜人

能面を裏返しても太郎月
寒月にいちばん近い玩具箱
瀧落ちて水のかたちに水の僧
団栗を蹴り鎌倉に病んで居る
行間と時間と樹間ちちろ虫

八重樫弘志

汗血馬春の星座を駆け巡る
ぐい呑みは竹筒が佳し雪見酒
水鳥も朝の襖や五十鈴川
ふらここの宙に我在り亜晩年
月下美人力尽くして何待つや

諸家近歌

山口 夕紀

目覚めれば今日も老人まづ麦茶
而して葉桜となり婆となり
夏負けてふわふわけむりのように居る
ねばならぬ人の世の柳水中花
今日の貌今日使い切り白木槿

吉田 耕史

音消して耳そばだてよ鯨来る
心まで老いてはならぬ紫蘭咲く
富士山を胴上げにする夏木立
信長は一気可成にところてん
鷹柱立つという日はただねむし

桃井美千代

木下闇岩肌喘ぎ喘ぎ踏む
苔の花歩を止め息を整える
山の小屋手からこぼれる夏星座
荒々と続く岩山積乱雲
夏神輿人の波行き風の道

横須賀洋子

金魚死す全身打撲らしい
存分に噫しあわせの水鉄砲
古傷のめそめそ揺れる蝌蚪の紐
蒟蒻を千切つてふやす嗅きかな
メロン切るどの神経を断ちますか

山崎 政江

揚羽蝶不意に止まるは鳴咽のように
恥ずかしいときもあつたね牽牛花
雨の日は眉も引かずに振花
蛇いちご女の手指なにを知る
水引草揺れねば何も起らない

三苦 知夫

灯台より地球瞰下ろす大南風
浜ひるがお津浪禍の町素通りす
ざぶざぶと卵の花が咲く郷界
電車発つ初夏のおっべしお伽の国
墓守みな昭和一桁花茨

前田 清方

豌豆もそら豆も咲き母の死後
父も母もおとうとも逝き葱坊主
納骨や墓の中なる五月闇
麦秋や遂に生家のがらんどろ
相続のはなし頓挫し青あらし

柳 恵子

午後からの強き筆圧著莪の花
誕生日苺シャリンと噛んでおしまい
唐辛しの逆立つ赤をわたくしす
麦嵐キホーテ来ぬと哭く風車
老醜に好きな鬼ゑて花きぶし

広瀬 梯子

ごくごくと雨吸ふ山の芽吹かな
進むごとく水辺にくる日雀
冬瓜やこころしづかな人とゐて
着ぶくれの困る眞ん中優先席
せせらぎの音も拾ひし花の空

松岡 節子

ちくちくと麦稈帽子遠き日よ
卵の花腐しフアックスの紙詰り
秒針の刻み遅かり雷の夜
じゃんけんぼんの鬼の決まらず冬夕焼
筑波嶺の雲をはき出す五月かな

馬場 暁子

ものの芽をうながす光雨の糸
梅が香や江戸百景の太鼓橋
耐へしのぎ衣七重の露の臺
土手の風葉裏きららの蓬摘み
白蓮や白無垢着せぬ別れかな

林 阿愚林

妖怪の踊り疲れて昼寝かな
言霊をため込む虫袋かな
香水一滴きつかけは軽めに
河骨や地球の揺れに垂直す
カシラナンコツ墨堤の櫻騒

松下總一郎

駅毎に出湯を配し草青む
老鶯や汝の足小さき足湯かな
山の宿輕羅乙女の茶の作法
冷房のバス「振り米」の峽を過ぐ
山独活の代価は箆に置いて来る

藤田 守啓

罪深き人に恋せよ鴛鴦の水
これからは不良老人はたた神
叛かれてためらい傷は蘭の香す
ゴスベルの少しの狂気年を越す
いびき博士は優しく生きて白桔梗

柳沢 純

八十路から輝いてゐる夏帽子
嬰兒も団扇の風も眠りけり



私の感銘句

大木 雪浪

天皇の背中に老という花野
 晩学に似たる處こたえ海鼠喰む
 ド根性見せあつている裸の木
 尺取りのまだ計つてゐる昭和
 雲雀追い吾も昇天の鍼使う
 天空の屏風となりし山の藤
 雨欲しや蟻一匹が立ち止る
 死をねむる母は白花さるすべり
 月光をノートに栞りけふを閉づ
 瞑想に形があれば枯はちす
 天空の屏風となりし山の藤

作者名 号頁
 秋谷 菊野 108 2
 秋山 勝男 108 4
 大山 冷子 108 4
 大川 園子 108 4
 香取 哲郎 110 2
 齋藤 溥子 110 3
 小出 治重 110 4
 清水 元子 111 4
 高橋由紀子 111 5
 齋藤 溥子 111 5

「天空の屏風」は単なる風景の表現ではなく、作者の心象の表現である。私がこの句に深く共感したのは、私も信州の佐久で、武州街道沿の急斜面の山の上に咲く山藤を見たことがあるからである。山藤はあまり派手な花ではない。遠く見上げた山藤の花は影絵のようであり、その時の私の心境にびつたりだった。晩春の花である藤だが、山藤は初夏まで咲くことも多い。桜のように「余花」という言葉を使う必要もある。

希田沙知子

炎昼を来て金管の真正面
 草茂るふるさとの墓遠くなる
 はなびらはさくらのみだみちのくに
 ふところ手妙にこの手が淋しくて
 希望をいつけ書く春のノート
 追ひかける夢はまだある葱坊主
 春野菜しゃべり出したら止まらない
 梅咲いてあの世もこんなところかしら
 山桜ふわつと雲に乗りかえる
 子が先に逝きし十年日記買う

山口 智子 108 2
 大塚 弘毅 108 2
 岩見ちづる 108 3
 青木 一夫 108 4
 金子 未完 109 8
 片山 依子 110 2
 岡田 淑子 110 2
 小林 雪枝 110 3
 小林 俊子 110 4
 重田 忠雄 111 5

原 悦子

立春のひかりを掬ふティースプーン
 冬木いま身に負ふものの無き軽さ

岩見ちづる 108 3
 大川富美代 108 4

大寒や赤児のように母くるむ
 白鳥を見て来て甘く煮る牛乳
 万緑のコンセントから充電す
 水仙を活けて煩惱研ぎ澄ます
 オーバーのポケットにある未解決
 月光をノートに栞りけふを閉づ
 億万の芽吹きに大地温もれる
 油蟬やぶれかぶれの意地通す
 オーバーのポケットにある未解決

そう、私もついつい先送りして後であわてしまふ事ば、外でも作者はなかなか解決出来ない問題を抱え、外に出す時もそれが頭から離れない。ポケットには入り切れない程の悩み？ それを「未解決」とさらつと詠んでいる。何だか右のポケットが重くなつて来た。

小林 俊子

片陰に汚染の牛の眠りおり
 体温より高き風なり百日紅
 慣れという心地おぼろの落し穴
 二の腕に心の温もれ金木犀
 うすごおり渡つてみたき月がある
 蝌蚪に足ラストダンスの靴がない
 石臼の果ては飛び石蟻のみち
 夏の果遣せぬものを積みあげて
 家それは匂いあるもの浅蜷汁
 落葉掻き人は大地に愛されて

慣れという心地おぼろの落し穴
 人生いろいろ。平穩であればあるほど、慣れという心地に、どつぱりで過してきた自分の生活を見直すきっかけになりました。おぼろの落し穴にはまらぬよう、時には緊迫感をもち、周りに見る目、聞く耳を大切に歩きたいと思ひました。何んともいえないほつとした気分、この先の余生を躓かず、楽しんで歩きたいと、もう一人の自分と掛け合つていきます。

國武 和子

慣れという心地おぼろの落し穴
 嘴を揃えてうぐいす餅が並ぶ

金澤 恵子 109 8
 小野富美子 109 8
 國分 三徳 110 2
 齋藤 すす子 110 3
 近藤 幸子 110 4
 谷本 元子 111 4
 高橋由紀子 111 5
 石井紀美子 111 9
 近藤 幸子 111 9

ブルーにもリングにもなる夏座敷
 追ひかける夢はまだある葱坊主
 万緑のコンセントから充電す
 また乳房持たぬ少女や蓮膨らむ
 神体は蛇ふり向けば豊の秋
 音のある絵巻を捲る花火の夜
 線量の有無は問ふまい未草
 いつも何か忘れし不安水母浮く

佐藤 映二

巡礼のまひるの闇を黒揚羽
 死をねむる母は白花さるすべり
 つくし野のどこ曲がってるも童歌
 落鮎の終の寂光放ちけり
 地震あとの栄螺の角の立ちどおし
 星とんで長崎の海闊厚し
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり
 石榴熟れむかしわれらに磔癖
 虫干しの匂ひの中に母が居る
 銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており

傷つけぬ言葉さがしにゆく枯野
 七転びぐらひは平気鬼栄螺
 冷飯のなかにもぐりし魍魎魍魎
 息づまるほどなだれくる夜の桜
 耐へるには保護色といふ冬仕度
 豹紋蝶放つメンタスクリニツク
 象老いてひねもす春の渚のよう
 いつの間にもう秋預かりしのち
 いつも何か忘れし不安水母浮く
 大いなるものには飽きて真昼の鵜
 いつの間にもう秋預かりしのち

今年もまた焼けつくような夏の暑さを漸く遣り過ぎた。行合いの空ゆく一片の雲を見上げたながら深い溜め息をつく。そうだと天から授かったこの命、精一杯生き抜いてやろうという作者の強い決意と充実感が句に滲み出ている。

長井 寛

山中とみ子 108 2
 相原 一枝 108 2
 岩尾 可児 108 8
 加藤 法子 109 8
 岡田 春人 109 8
 坂野 恒子 110 3
 久野 康子 110 3
 関根 信三 111 4
 高橋富久江 111 5
 大畑 等 111 9

関根 信三

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二六四回(平成二十六年五月十三日)

司会 徳吉洋二郎

山独活を食いきつねの声を出す
 ハンカチの花にサインを小鳥たち
 歩かねば肉体怖し苔に花
 上つて下つて女を捨てて滝の正面
 いつの間に青葉いつの間に米寿
 柳絮飛ぶ十年会わぬ人に飛ぶ
 業平忌をみな等は皆美しき
 仏足の人肌となる傘雨の忌
 あおむけに脳を眠らせ聖五月
 風出て来出入りとたえし蟻の穴
 これはもう呪術でしかない余寒
 麦の秋何を汚して帰ろうか
 ふんだんに竹の子たべて平和とは
 就活や暗がり咲く著莪の花
 杖捨てて若葉の国で鳥になる
 遠ざかる機影憲法記念の日
 下闇の中の日の斑や定めなく
 白雨来るきやりばみゆばみゆは言葉
 母さんは白が好きなのカーネーション

楠見 恵子
 吉野 精
 山中 葛子
 大畑 等
 岡田 淑子
 なかもと淑子
 榎垣 梧樓
 村上 澄子
 白木 暢子
 股野 久子
 小林 実
 林 阿愚林
 大村 錦子
 大塚 弘毅
 金子 未完
 徳吉洋二郎
 後藤 章
 佐藤 晏行
 横須賀洋子

ふくらはぎ揉んでこの世の夏に入る
 蒼朮を焚かむ大王烏賊食はむ
 メロン切るとの神経断ちますか
 世の中や扇子ひらけば目高の絵
 昼寝覚まらずは棧から見えてきし
 新緑がばかにまぶしい不倫の書
 五月病三四郎池にカッパ浮く

村上 澄子
 榎垣 梧樓
 横須賀洋子
 小林 実
 楠見 恵子
 大村 錦子
 徳吉洋二郎

●第二六五回(平成二十六年六月十日)

司会 山中 葛子

抜羽啜へ武装をしたる羽抜鳥
 浮草や頭の悪き万年筆
 柱より梁へ守宮の移りつつ
 「戦後」は何時までのびる青田波
 穴子鮨高脂質など何処へやら
 荒梅雨や大樹の影の獣めき
 ロボットは反抗期なり夏の雲
 卵持つ守宮の子チツと鳴きにけり
 子の齢い二倍を生きて夏来る
 たましいは売らぬときめし蛍の夜
 愛を引寄せサーファー等波に乗る
 ゴキブリの家族ぞろぞろやもめかな

佐藤 晏行
 大畑 等
 後藤 章
 金子 未完
 なかもと淑子
 股野 久子
 岡田 淑子
 大塚 弘毅
 白木 暢子
 山中 葛子
 林 阿愚林
 吉野 精

人工の骨も身の内西瓜割る
 夏の夜札一枚をふところ
 夕仕度バセリを水に放ちけり
 打水のたちまち乾き髑髏
 力出し損ねし牛も冷やしけり
 蝸牛落日前に走り出す
 小説家盾かごあふれ梅雨深む
 田水沸くわたしのなかのジブシーに
 五十男見入る驛舎の七夕竹
 午睡から目覚め陛下の赤子かな
 兜虫が怖い子も戦場に
 日傘さす腕も返せ稀勢の里
 大蜘蛛に客問そっくり明渡し
 白靴や遠き私が呼んでる
 病名はお一人ひとつ花茗荷
 ほたるぶくろ肝には肝の座りかた
 我が息の浮輪あるなり我ならず
 落し文肩の力を抜けと言う
 平面に青田斜面に合飲の花

横須賀洋子
 白木 暢子
 股野 久子
 徳吉洋二郎
 榎垣 梧樓
 大塚 弘毅
 吉野 精
 楠見 恵子
 大村 錦子
 小林 実
 金子 未完
 佐藤 晏行
 なかもと淑子
 林 阿愚林
 岡田 淑子
 山中 葛子
 大畑 等
 村上 澄子
 後藤 章

●第二六六回(平成二十六年七月九日)

司会 榎垣 梧樓

じゃがいもの芽をとる夜や遠くにユダ
 父母の遠のく早き麦の秋
 樹海まで十歩くちなわまで一步
 コンビニでチンして夏の荒野かな
 心太昨日のことまでは分かる
 透明人間どこに出ようか夏帽子
 玻璃越しに顔偷まれし蝶の昼
 潮干狩あしたの穴を掘っており
 手つかずのみどりの中に少年期
 鳥たちの会議中です青葉騒
 踏んだのは米粒詰草無傷なる
 卵波してクラス替なき夫婦かな
 蜘蛛の囿は破られ奥の命綱
 仮設にも声の宅配慈悲心鳥
 木下闇シャガールの馬繋がれし
 踏み出すや重量感を持つ縁
 実力の落差胸中瀧しぶく
 ふるさとの記憶あやふや浦島草

大畑 等
 芝崎 梓
 細根 栗
 加藤 法子
 細野 一敏
 長浜 聰子
 徳吉洋二郎
 椿 良松
 馬淵 津枝
 三須 民恵
 並木 邑人
 小高 稔
 大塚 弘毅
 鈴木 陽子
 矢野 忠男
 石井紀美子
 山崎 幸子

万緑の沸点過ぎれば風になる
 ハンモック乗せて良いのは星五つ
 気位の高いほうから棒のまま
 歳月のあとかたも国防論
 蛭袋ひとつ灯しても国防論
 蚕豆のふわふわベッド空きました
 尼寺に墮胎を赦す青ふくべ
 麻酔から醒めひとゆらぎ水中花
 蛇の衣気怠きまに暮れ泥む
 引き出しの妻を知らずや水中花
 火取虫質にするなら句を捨てよ

山崎 幸子
 三須 民恵
 鈴木 陽子
 芝崎 梓
 徳吉洋二郎
 椿 良松
 小林 実
 馬淵 津枝
 加藤 法子
 細野 一敏
 並木 邑人

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第三十五回(平成二十六年五月二十二日)

司会 椿 良松

第三十六回(平成二十六年六月二十六日)

司会 芝崎 梓

青葉騒吾が黙観世音の黙
捨てきれぬ我執引き摺り蟻の列

細根 葉
石井紀美子

水母来る敏雄は留守の日本丸

大畑 等

万緑や御仏はみな多面体

長浜 聰子

暑氣払い飲み放題に釣られたり

小高 稔

あなたなる低音不気味青葉木苑

大塚 弘毅

二上がりの舌にからみし鱧の味

矢野 忠男

●第三十七回(平成二十六年七月二十四日)

司会 細野 一敏

一生は疾くひと日は永く花木權

芝崎 梓

炎天下虫も殺さぬ顔で行く

馬淵 津枝

額顛顛顛顛顛顛梅雨深む

徳吉洋 二郎

父の父もまた禿げ頭蚊を叩く

大畑 等

箇条書きして金魚に託す置き手紙

加藤 法子

沸き起こる黒人霊歌群向日葵

長浜 聰子

友達の友達と友達になつた夏

小林 実

ぼたぼたと身も魂もなめくじり

大塚 弘毅

生涯を水の地球にあめんぼう

樺 良松

梅雨明けの束の雑巾男の手

三須 民恵

頭韻を叩いて乾く羽抜鶏

並木 邑人

号泣やペロを後ろに夏帽子

細野 一敏

原電やみみずの叫び土欲しや

小高 稔

何を見ているモナリザのサングラス

石井紀美子

蜘蛛の囀の裏かきたるか諸葛亮

山崎 幸子

白玉や過ぎたる日々は歪なり

鈴木 陽子

黄雀風ガムランの音かすかなり

矢野 忠男

○×のオブジェ銀色半夏生

●第二十五回(平成二十六年六月十四日)

司会 小林 俊子

團欒の岩場を巡る燕の子

小林 俊子

薔薇一輪校長室を広くする

野口 京子

海ゆかば海月を放つおとこ見し

大畑 等

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第二十五回(平成二十六年六月十四日)

司会 小林 俊子

團欒の岩場を巡る燕の子

小林 俊子

薔薇一輪校長室を広くする

野口 京子

海ゆかば海月を放つおとこ見し

大畑 等

引力のかたちは大地蝸牛落つ
バルテュスの素描の少女練香水

伊藤 希眸
佐藤 鈴子

信条は反帝反スタ羽拔鳥

松澤 龍一

夕立来る視野の限りの牧草地

栃木 きよ

そよがねば考える葦にはなれず

小張 直子

刎頸の友向日葵の咲く午後三時

長井 寛

いい人は疲れるばかりあばれ梅雨

岡田 春人

塩いよよ堅くしまりし父の日よ

下村 洋子

猫の鼻ふいてやるなり桜桃忌

イザベル真央

●第二十六回(平成二十六年七月十二日)

司会 イザベル真央

花南天愚者を真白く癒しをり

栃木 きよ

薔薇に水ハーフタイムへ気のエール

佐藤 鈴子

父母の忌をとり違えたる網戸かな

大畑 等

信貴山の虚空蔵堂蚊帳を出る

イザベル真央

あの頃の笑顔まっ赤なさくらんぼ

伊藤 希眸

半眼に生きて悔なし秋桜

小張 直子

降りみ降らずみ凜として古代蓮

野口 京子

江戸城のいしづえを曳く蟻の列

長井 寛

手囲いに蛭ずしりと渡される

下村 洋子

去る者と来る者となり揺れ枯梗

高橋 宗史

退屈の中の退屈蟻地獄

岡田 春人

ぬばたまの夜をピコピコと電子音

松澤 龍一

●第二十七回(平成二十六年八月五日)

司会 岡田 春人

サフランや資材置き場の水の錆

栃木 きよ

静けさや一面のひまはり笑ふ

岡田 春人

カナンまでつづく道程蟻の列

長井 寛

口進む猥歌炎天のスクランブル

高橋 宗史

夏の蝶横切り青い空二つ

松澤 龍一

普陀落より男来たりて梅を干す

大畑 等

ひまわりや真昼の主役ゆずれない

野口 京子

八月の水はすがたのまま暮れる

下村 洋子

地のほてり絡む陸橋遠花火

小林 俊子

殻を脱ぎ蟬の産着はシースルー

佐藤 鈴子

ひろば

市原市俳句協会創立五十周年

四月二十六日、五十周年記念春季俳句大会が、市長・議長等の来賓を迎え開催された。記念式典では、創立会員である井口昌樹さんの講演、功労者表彰などを行った。俳句大会は連句協会会長白杵游児氏を主選者に、兼題の部は県内の一〇八人から四三二句の応募があり、また当日の席題句会は六〇人の出席をもって実施された。(並木邑人記)

☆兼題の部／鶯・原・雑詠の三句一組

市原市長賞

野焼して皆原人の貌となる

白鳥紅星子

市原市俳句協会賞

うぐいすや上り框で済む話

西澤 照雄

市議会議長賞

春雷や足早に観し原爆図

大内田芳乃

教育長賞

風光る原に立つ牛座る牛

松本 正子

☆席題の部／葱坊主・春日傘

市原市長賞

ほめ上手の風が撫で行く葱坊主

内田 聰子

市原市俳句協会賞

春日傘たたみて空の広さかな

中村 翔

市議会議長賞

村ひとつ朝日が包み葱坊主

山崎 節子

教育長賞

軍艦なき軍港黒い春日傘

重田 忠雄

第三回 ミニ吟行会

上総・国分尼寺跡

国分僧寺跡（市原市）

日時 平成二十六年七月二十日（日）
会場 市原市民会館
司会 並木 邑人



説明を聞きながらも句作り

今年の梅雨は大荒れで、あちこち被害が加わって心配していました。皆様傘持参での参加でしたが心掛けの良さで一日お天気に恵まれました。熱心な参加者達は八時三十分以内房線の五井駅に集合し、バスにて市原市役所

で降ります。道路を挟んで会場の市民会館と国分僧寺跡があります。係の案内に導かれ国分尼寺跡へと向います。跡地の一角に展示館があり出土品等が展示され、映像と復元模型とによる学芸員の方の説明に天平の時代が偲ばれます。素敵な演出のブラインドを開くと窓から紅殻色の復元回廊が目飛び込み、光と影の天平の刻の中に居ます。次はタブの大木の残る金堂跡瓦積基壇、朱色の回廊、中門と説明を受けながら歩きます。皆様手慣れたもので句材を拾ってはどんどんメモされておられます。

市民会館前迄戻り、昼食を済ます方と国分僧寺跡に向う方とそれぞれ別れて行動です。僧寺跡は如何にも俳人好みの苔むした茅葺き入母屋造りの薬師堂が建っています。高さが六十三メートル以上で今の市役所より高く、法隆寺五重塔の二倍近くもあつた上総国分寺七重塔は今は無く、巨石の礎が夏草に覆われています。

十三時より受付開始し出席者三十四名の六十八句が集計されました。地元代表の小高穂さんの開会挨拶、大畑会長の挨拶に続き初めて参加された八名の方達の自己紹介と進行して行きます。十四時五十五分檜垣梧樓さん加藤法子さんによる披露。十五時四十五分からのフリートークがとても勉強になりました。選を入れた方の講評、点を入れなかった方の講評と司会の並木邑人さんの手際が良く、沢

山の句を見ていきます。吟行は同じものを見て来ているのに、作品はとも個性的で参加された方達の句の捉え方、表現の仕方等とても楽しく勉強させて頂きました。

十六時四十分予定通り滞りなく閉会する事が出来ました。

十七時三十分五井駅前「庄や」に席を移し、二十三名もお集まり頂けた懇親会の俳句談議も大いに盛り上がり皆様の熱を帯びる会話も楽しく、又のミニ吟行会を期待し散会となりました。
（細野一敏記）

△参加者作品▽（二句のうち一句）

| | |
|-----------------|-------|
| 遙かなる塔の礎や夏燕 | 池田 博臣 |
| 炎暑という敵天平の風がとく | 石井紀美子 |
| 回廊の緑涼しき連子窓 | 内田 聰子 |
| 即刺せる尼寺の藪蚊の俗気かな | 大畑 等 |
| 梅雨晴れて竈の口のほの暗き | 大村 錦子 |
| 蛍の夜尼僧は白く消えにけり | 岡田 淑子 |
| 天平の汗固まりて赤柱 | 小高 稔 |
| 夏の風回廊ぬける連子窓 | 小多田文子 |
| 回廊を対角線につばくらめ | 片山 依子 |
| 夏萩の暗き辺りがすでに尼寺 | 加藤 法子 |
| 天平は仏法の国さるすべり | 金子 未完 |
| 外来の夏草なれど国分尼寺 | 小林 実 |
| 天平のむかし偲めば梅雨晴間 | 近藤 榮子 |
| 尼寺僧寺渡りきれない蟻の道 | 重田 忠雄 |
| まほろばの嫁ぎそこねし青葉木菟 | 白木 暢子 |
| 夏草や上総の国の臍におり | 鈴木 瑩子 |

道をしへ万葉古道旅はるか

尼寺支う瓦千万蟻太し

夏野原回廊にふと天平人

遠遠とシルクロードより国分尼寺へと

瑠璃揚羽届かぬ距離の尼僧かな

天平の尼寺起こし絵のよう虹のよう

市役所より高かりし塔草いぎれ

白南風や僧衣のやけにからみつく

回廊に蟬一生を鳴かぬ蟬

槍砲放電して梅雨曇

緑雨締め出す天平の門

黒揚羽ふはふは感の怖くなる

脳固し門かたし尼寺の夏

夏草や眼裏に見る大伽藍

七夕や法花寺金寺と法の道

夏草や尼寺の榮華をきくひとひ

天平の尼転生し夏の蝶

尼寺の井戸・湯屋いまも裸かな

鈴木 正博

高木 一恵

高橋 宗史

竹内 絵視

徳吉洋二郎

長浜 聡子

棗 楯伊

並木 邑人

檜垣 梧樓

保坂ミエ子

細野 一敏

増田 豊子

馬淵 津枝

矢野 紀子

山崎 幸子

山中 頼子

吉野 精

渡辺 澄

青葉研究句会・一泊吟行記

当句会で一泊吟行を！との声に、八月四日（月）と五日（火）に鬼怒川温泉にて一泊吟行句会をとりおこないました。十一名の参加で、ひたすら日光街道を行く酷暑のバス旅行でしたが、楽しいひとときを過ごしました。ホテルに着くころには雷と土砂降りに見舞われ、予定の龍王峡行きは中止してホテルの近



龍王峡で記念写真

くの食堂で昼食。その大金魚にみんなびっくりして大騒ぎをしました。食堂を出る頃には雷雨は去り、鬼怒楯岩大吊橋などを散策。句会はホテルのロビーの一角で三時から五時まで。三句出して真剣かつ楽しく批評を交わしました。夕食後は一人八句出句の袋返し。好評、酷評に冷やかしても入ったの三時間。大いに盛り上がりました。翌日は龍王峡の虹見の滝周辺を散策。楽しくて豊かな二日間でした。

（山崎幸子記）

参加者作品（三句のうち一句）

- 次の雷待ちて男の二人部屋 大畑 等
- 雷神の目覚める谷の奥も谷 並木 邑人
- 雷鳴あまりにも近し酒とする 加藤 法子
- 吊橋を揺らすは誰ぞ法師蟬 山崎 幸子
- 暖簾より雨足見えて味噌ラーメン 長浜 聡子
- いかづちに下腹みせて大金魚 檜垣 梧樓
- 消費税込かみなりさんの置土産 矢野 忠男
- 一滴を源流として夏の川 徳吉洋二郎
- 淵に栖む八大竜王滴れり 細根 栗
- 川音のたかぶるあたり夏の蝶 星野 一恵
- 雷鳴に負けぬ鐘突く縁結び 細野 一敏

新会員紹介

船橋市前貝塚町 阿部 良治（会員）
（推薦者 山中葛子）

朧夜のごとき記憶の会釈かな
紫陽花や雨読日和の続きおり
青田波土踏みたくて畦に入る

図書紹介

■句集『私雨』 塩野谷 仁
平成二十六年五月二十五日 角川学芸出版
きのうにも昨日ありけり薺粥
行き先はきさらぎのあの水鏡
野遊びの終りはいつも大きな木

《會員・会友の近況》

・過日元力士舞の海の講演を聞く機会がありました。その中で相撲界でもいわゆるモンスターペアレントが何かと口出してくる現実があると伺いびっくりしました。(山中 頼子)

・今は時々地元の小学校へのボランティアをしております。後は上達しない俳句との格闘です。またあちこちと出掛けております。(山崎 幸子)

・十数年ぶりに青年部の勉強会に行つて来ました。須藤さんが部長をなさつておられた頃とはずいぶん様変わりしていました。一抹の寂しさを感じました。(宮本美津江)

・以前から悪かつた視力が加齢と共にひどくなり、吟行会など参加したくても、仲々出来ません。句作も写生句は苦手、色の見分けも濃い色、薄い色の区別がつくくらいです。したがって、会の行事もほとんど不参加で申し訳なく思つております。(渡邊 廣子)

・今回投稿させて頂いた句の中で象鼻杯とは蓮の葉の中心に小穴を開けておき一人が葉をささえ、一人が酒を注いで、客が茎の根元の方に口を当て「象に見立て」吸うことです。俳句誌「秋」主宰(佐怒賀雅美氏)の清流句会(指導者高久清美氏)で、七月三日千葉公園において「大賀ハス吟行会」を行い、蓮も吟行も初めての方々に、大変喜ばれました。(山口 梅子)

・現俳入会と同時に「研修通信句会」に入会して五年が経ちました。多くのご指導と刺戟を頂きまた来期も申し込みました。(吉岡 一三)

・現在、介護付老人ホームへ入所中の家内の見舞が一カ月の半分、残りの日数で俳句教室、句会、etc.に追われていますが、何んとかがんばっています。力及ばずで申

し訳ありません。
・季語に助けられ、又、季語に苦しむ昨今です。(松岡 節子)

掲示板

《會員・会友異動》

●入会 (会員) 荒井芳子、鈴木まんぼう、清宮迷走子、田口霞子、田中つとむ、西村峰子、片岡伊つ美、神作仁子、高崎正志、三浦 侃

●退会 (会員) 萩原透葉子、黒澤花恵 (会友) 秋元恵美子、大坪秀生

●移転 (会員) 田村幹子、鈴木陽子 鮫島いづみ千葉市中央区村田町(神津富士子(船橋市高根台へ)

●住居表示変更 (会友) 水村魚愁(野田市野田に)

●平成二十六年第二回幹事会

日時 平成二十六年五月二十日(火)

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成二十六年定期総会・俳句大会の結果と収支報告について
- 二、春の吟行会の結果と収支報告について
- 三、平成二十六年度秋の吟行会計画について(日時、候補地)
- 四、三吟行会(市原)について
- 五、第一一三号会報について
- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
- 七、第二十一回関東甲信越・静ブロック連絡会議について
- 八、各研究句会の状況について

- 九、平成二十七年定期俳句大会 大会係、選者諸否について
- 十、三十五周年記念俳句大会 日時・場所・講師について
- 十一、その他

□□事務局・編集部だより□□

●十月二十六日(日)に恒例の秋の吟行会が行われます。今回は佐倉市の国立歴史民俗博物館と佐倉城趾が吟行の舞台です。皆さん、奮つてご参加ください。博物館は原始・古代から現代まで充実した展示がみられます。どこかに時代を絞ってみる方法もあると思います。

●平成二十七年三月十五日(日)に、定期総会・俳句大会を開催します。俳句大会の作品募集が早くも始まります。会員以外の方、他地区会員も参加できます。お誘い合わせの上、ご応募をお願いします。

| | |
|-----------------|----------------------|
| 現代俳句千葉 第一一四号 | 平成二十六年八月三十一日発行 |
| 発行人 千葉県現代俳句協会 | 会長 大畑 等 |
| 現代俳句千葉編集部 | 〒278-0037 野田市野田六六五番地 |
| 千葉県現代俳句協会事務局 | 松澤 龍一 |
| | 〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 |
| 電話〇四七-四四七-二九一二 | 高木 一恵 |
| FAX〇四七-四四七-二九七二 | |